

秩父郡小鹿野町下塚居古墳における遺構の検討

青 笹 基 史

はじめに

秩父郡小鹿野町は埼玉県西部に位置する町であり、町内に所在する下塚居古墳については、矢鏃の資料化と検討を既におこなっている(青笹 2019)。本論ではその遺構について、調査図面と写真を整理して、古墳の基礎的な情報を可能な限り提示することが目的となる。

1. 下塚居古墳の地理的環境

下塚居古墳の所在する秩父郡小鹿野町は秩父凹地帯に位置する町で、荒川支流の赤平川が西から東に向かって流れている。赤平川北岸の低位段丘上を中心に遺跡が分布しており、群集墳は赤平側北岸の蛇行する位置に集中している。下塚居古墳はそうした群集墳の1つである千尋原古墳群中の円墳である(図1)。

古墳時代の秩父郡の交通を考えた場合、秩父盆地の入口にあたる寄居町方面から盆地方向に向かう人の往来が想定される。現在、入間市から小鹿野町に至り群馬県上野村を經由して長野県茅野市に至る国道299号線と、小鹿野町から秩父市吉田地区に至る県道283号線が小鹿野町を通る幹線である。急峻な地形の秩父凹地帯における地理的な制約は、古墳時代も現在も変わるものではなく、おそらくこうした現在の交通路と多少の異同はありつつもおおまかなアク

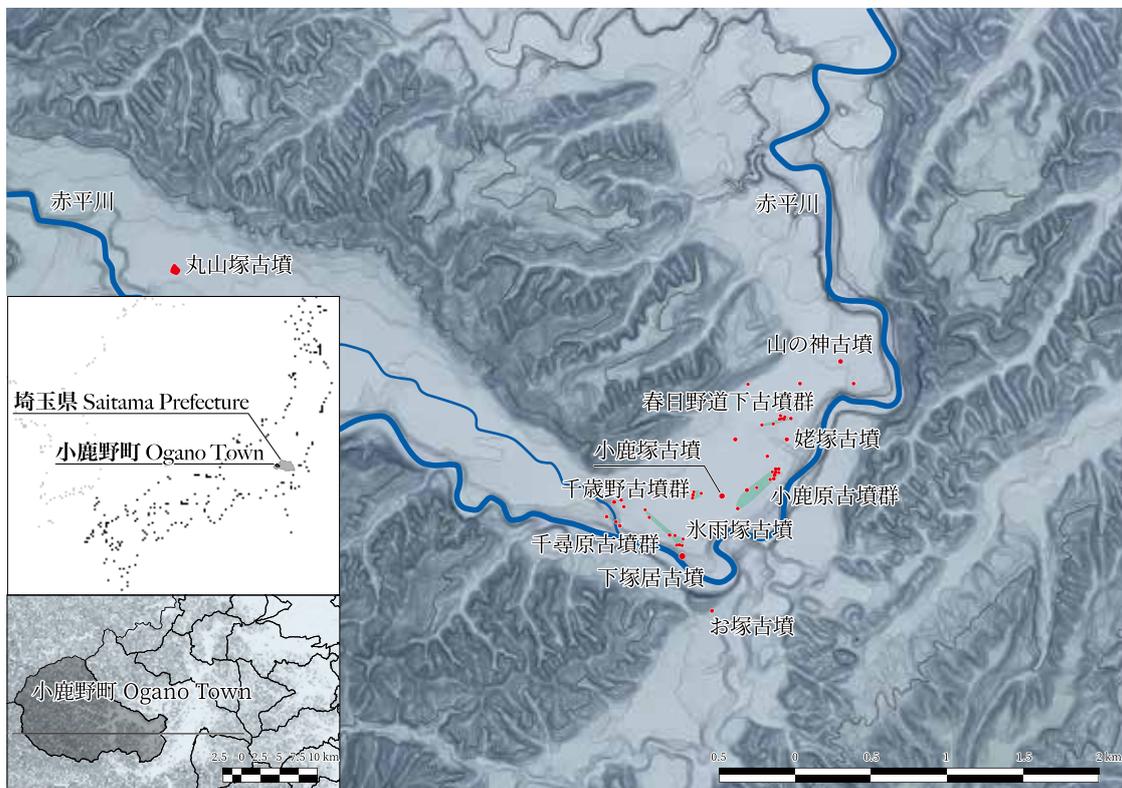


図1 秩父郡小鹿野町の所在地と同町内に所在する古墳の分布図

セスは変わりがなかったものと考えられる。こうした交通状況を仮定した場合、赤平川北岸の群集墳の集中域は秩父盆地から長野方面へ抜けていくルート沿いに位置するといえる。古墳の築造可能な土地利用範囲に限られるための立地であり、または、眺望性を意識した占地であると解することができる。立地の背景は多重の要素を考えるべきであり、本稿ではその判断を保留したい。

2. 下塚居古墳の概要と調査の経緯

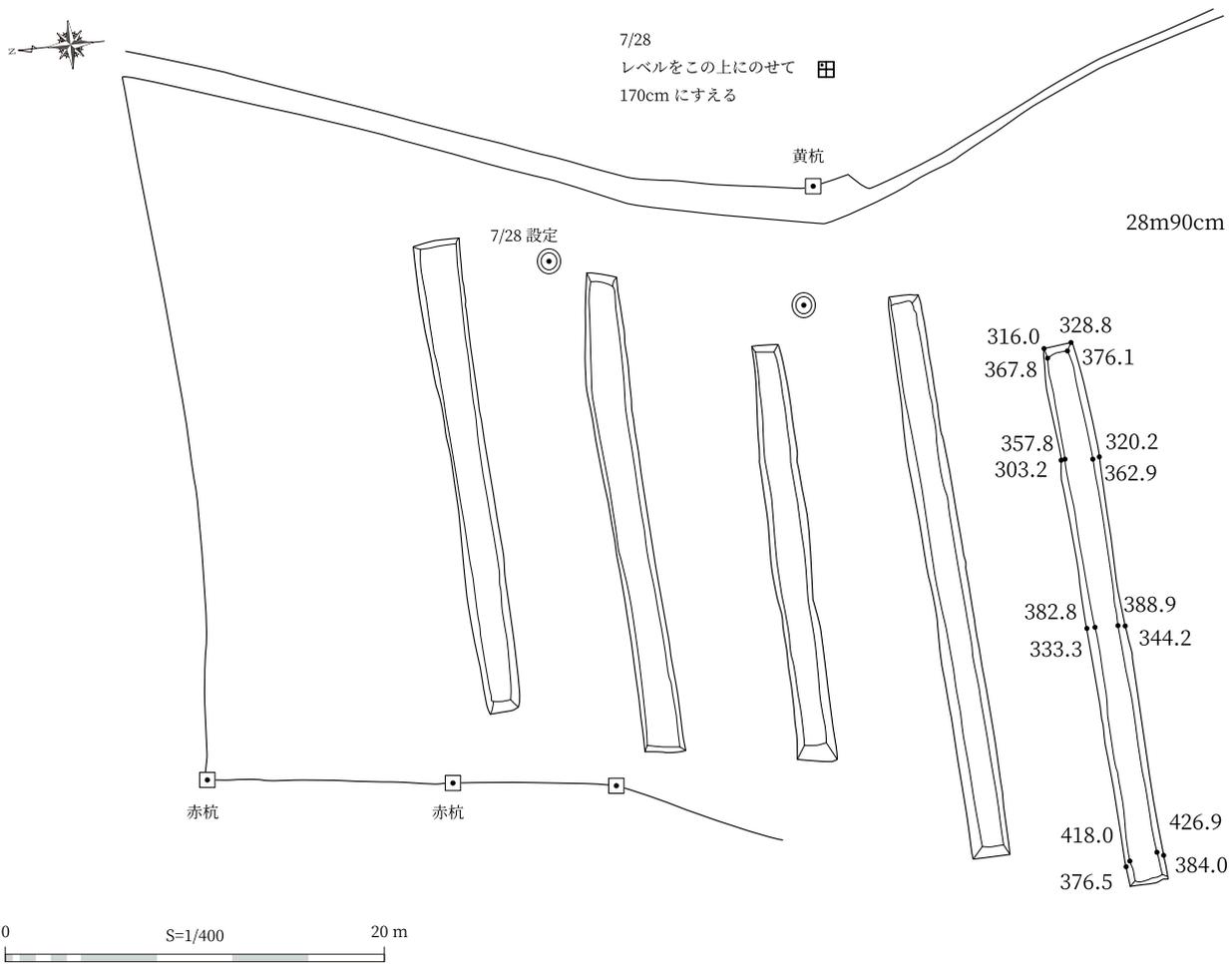
秩父郡小鹿野町下塚居古墳は埋葬施設に無袖式横穴式石室を採用している円墳である。1994年7月から8月にかけて発掘調査された古墳で、その調査内容のうち、推定される調査期間と出土矢鏃については既に提示している(青笹2019)。筆者は2017年から小鹿野町での調査を継続しており、本稿はそのうち小鹿野町教育委員会が保管している図面と写真に関する整理作業の成果を報告するものである。なお石室の部位名称は第8回東海考古学フォーラムの概念規定を援用する(東海考古学フォーラム三河大会実行委員会2001)。

3. 下塚居古墳の遺構図面

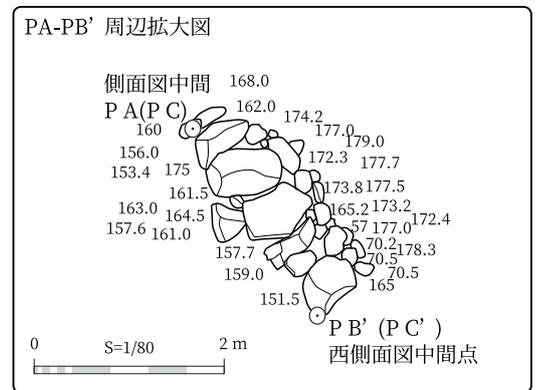
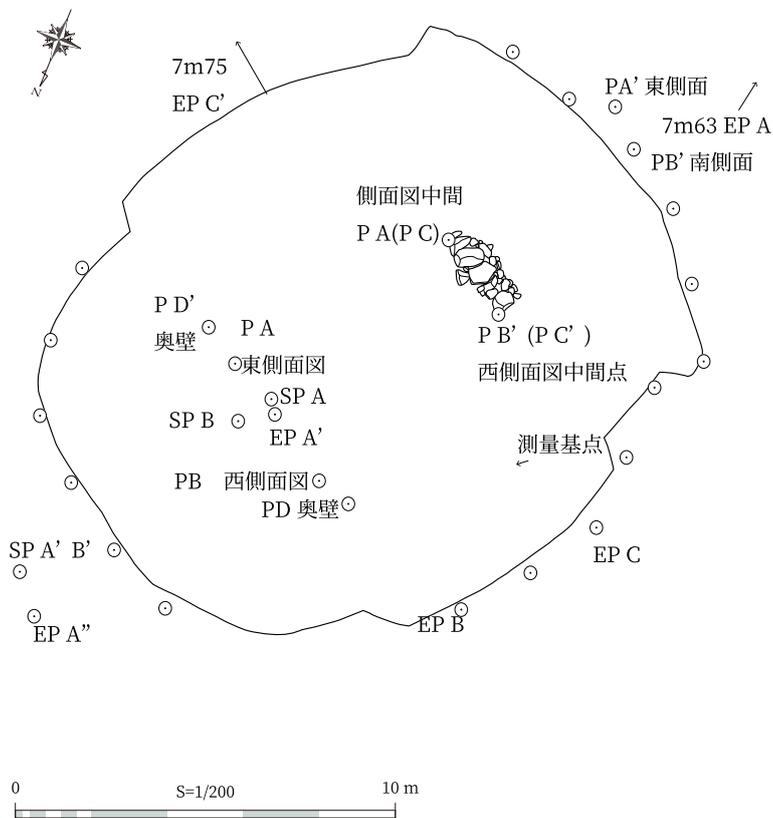
小鹿野町教育委員会で保管される図面は12枚ある。なお、図面中に記されるレベルリング等の数値は厳密な標高等が判然としないものの、比高を記録する要素として重要であり、調査時の記録を最大限保存するために、可能な限り記載することとした。次頁以降の図では、各図面について図中右下に下記と対応する番号を付記している。下記のうち作図日のうかがえるものについては文末の括弧内に記している。

1. 下小鹿野での試掘状況(S=1/200) 試掘段階の調査区全体図と思われる(1994/7/28)
2. 石室内床上+10cm(S=1/20? 記載なし) 床上から10cmの遺物取上状況
3. 補足ポイント(S=1/20? 誤りか?) 各図面にみられる地点がプロットされる(1994/8/19)
4. 奥壁裏込め状況(S=1/20) 写真34と照合可能。SPA-SPB-SPB'のセクション図(1994/8/18)
5. EPAからのエレベーション図(S=1/20) EPA-EPA'-EPA''のエレベーション? (1994/8/18)
6. EPB-EPB'のエレベーション図(S=1/20) (1994/8/18)
7. EPA''までのエレベーション図(S=1/20) 図中に「エレベーション図(A'-A'')」と記載され、EPAからのエレベーション図であるNo.5と一連と考えられる(1994/8/18)
8. 石室右側壁平面図(S=1/20) 作成途中と思われる平面図(1994/8/17)
- 9上. 石室西側壁セクション図(S=1/20) B-B'のセクション図(1994/8/11)
- 9下. 閉塞石(マ)内側セクション図(S=1/20) 玄室-羨道間の石積み。閉塞石(1994/8/12)
- 10上. 石室東側壁セクション図(S=1/20) PA-PA'のセクション図(1994/8/11)
- 10下. 石室奥壁セクション図(S=1/20) D-D'のセクション図(1994/8/17)
11. 石室平面図(S=1/20) 各図面にみられるポイントの平面的な位置がうかがえる(1994/8/10)
12. 石室内遺物取上状況(S=1/10) 図中の表から8/1,2,4,9に遺物を取り上げている(1994/8/1)

上記12枚について、図2～9に提示している。なお、親縁性の高い図面をなるべく一枚の図に収めるよう配慮したため、一部図面番号が前後している箇所が存在する。



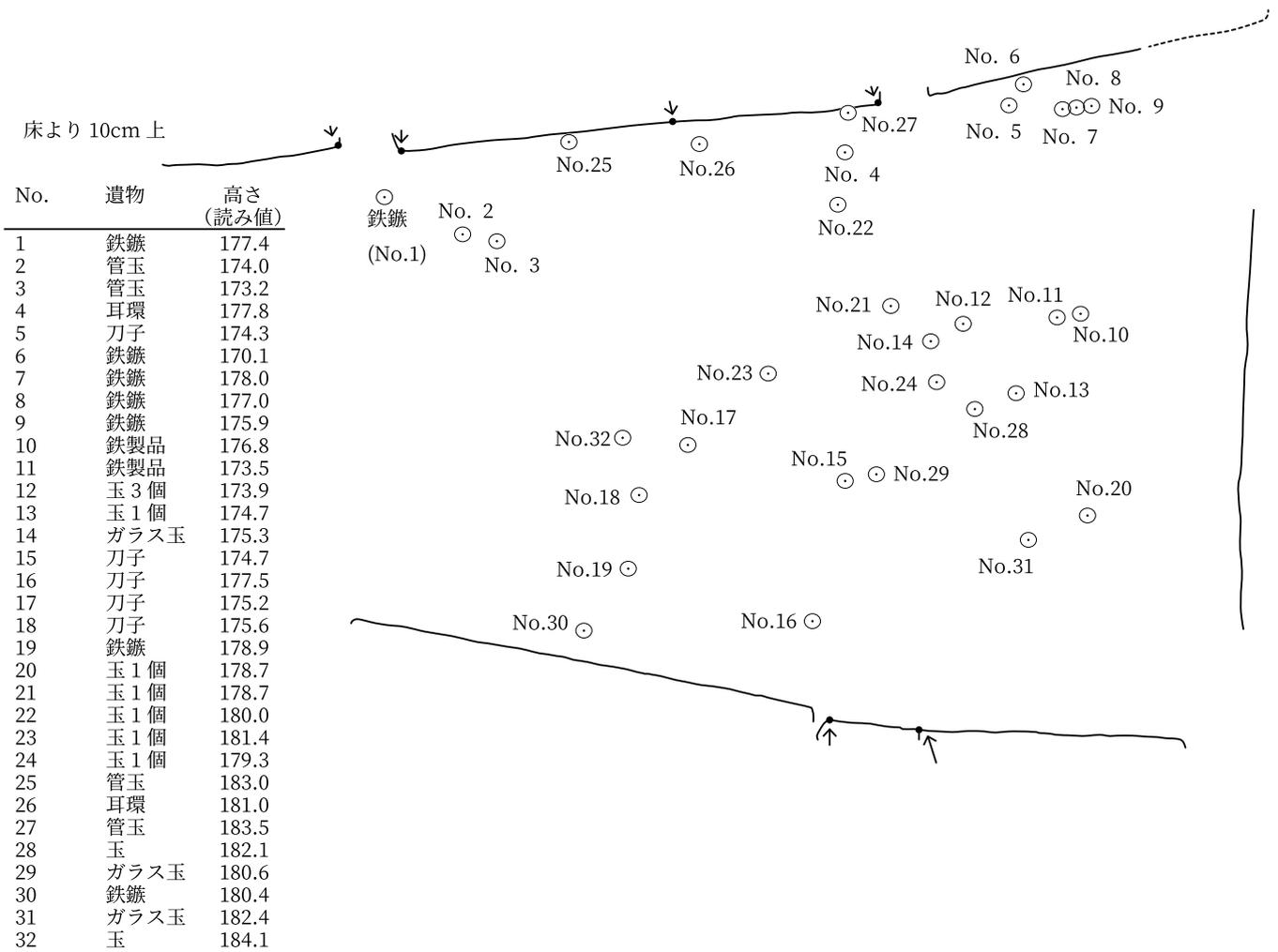
No. 1



＜筆者注＞ PA-PB' の数値は各石の絶対高の読み値と思われる

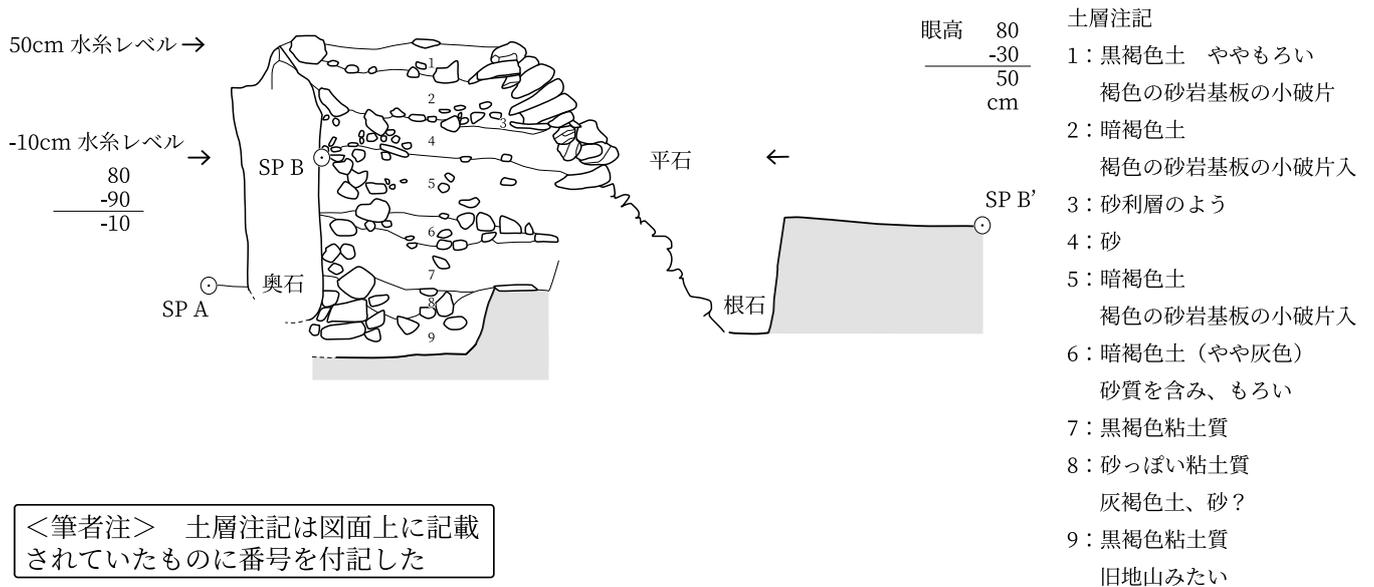
No. 3

図2 下塚居古墳遺構図面(1)



原図に縮尺表記なし 25%縮小

No. 2



No. 4

図3 下塚居古墳遺構図面(2)

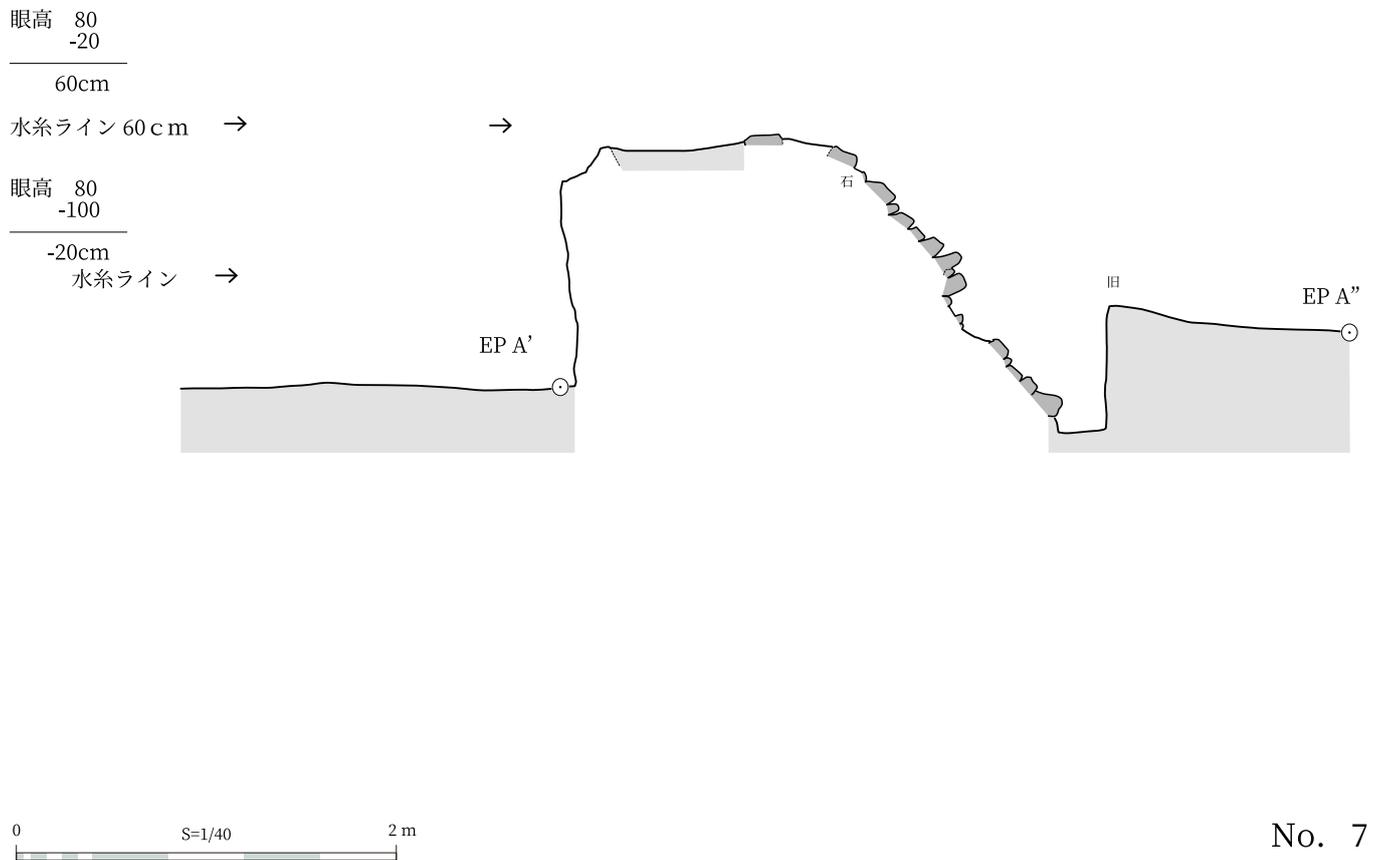
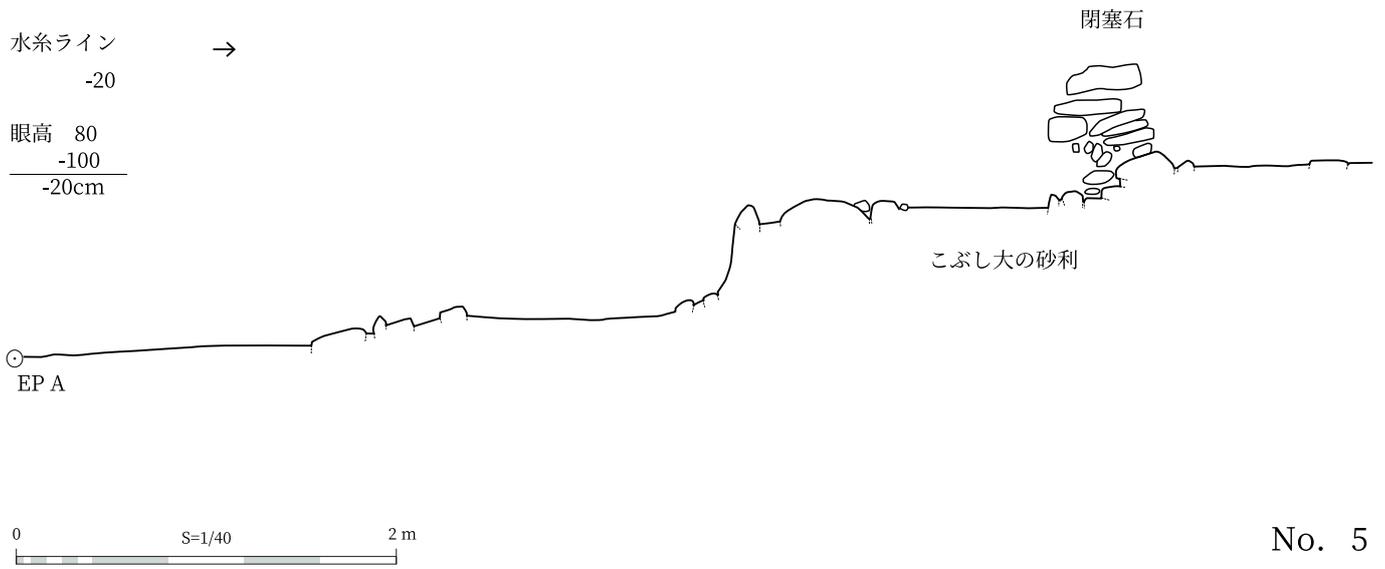
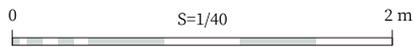


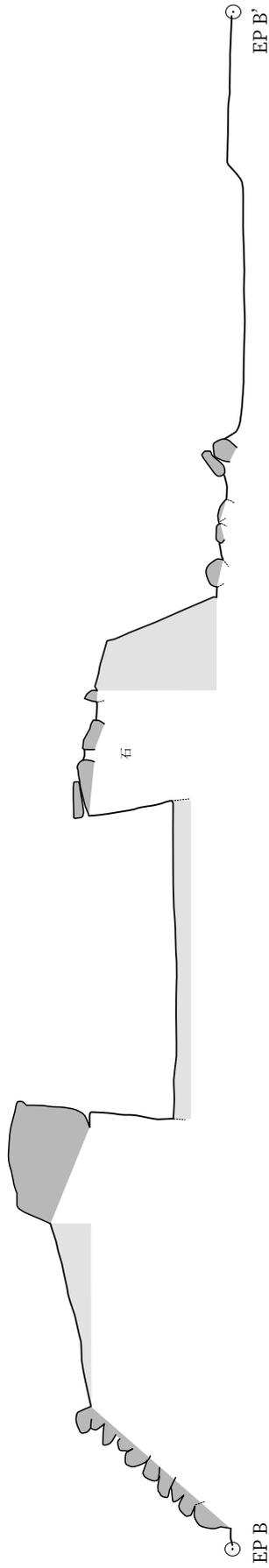
図4 下塚居古墳遺構図面(3)



エレベーション B

眼高 $\frac{80}{-50}$
30cm

水系ライン 30cm →



エレベーション C

眼高 $\frac{80}{-100}$
-10cm

水系ライン -10cm →

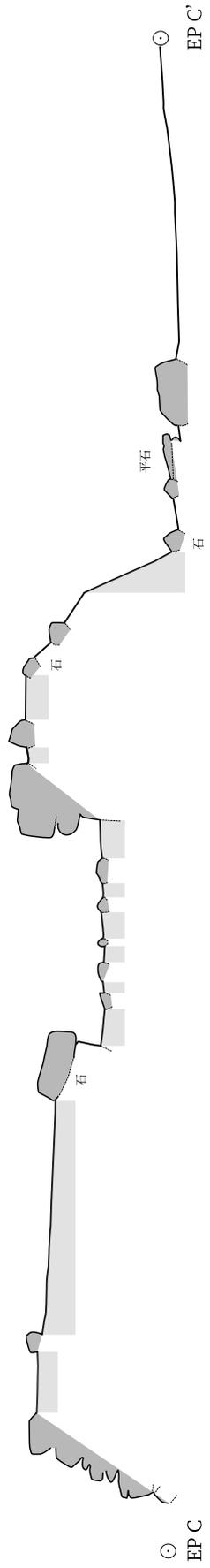


図5 下塚居古墳遺構図面(4)



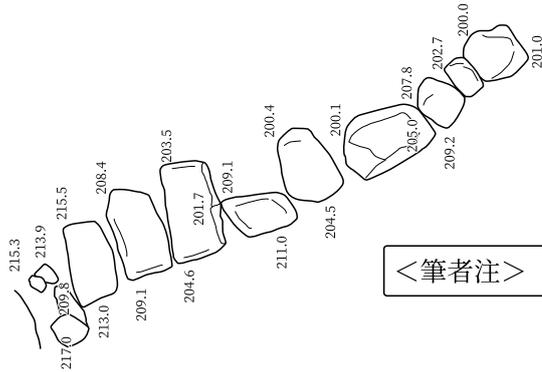
○ 平面図ポイント

7m81cm のところに測量点

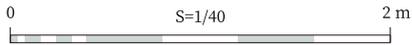


● 測量基点

○ PB 中間点

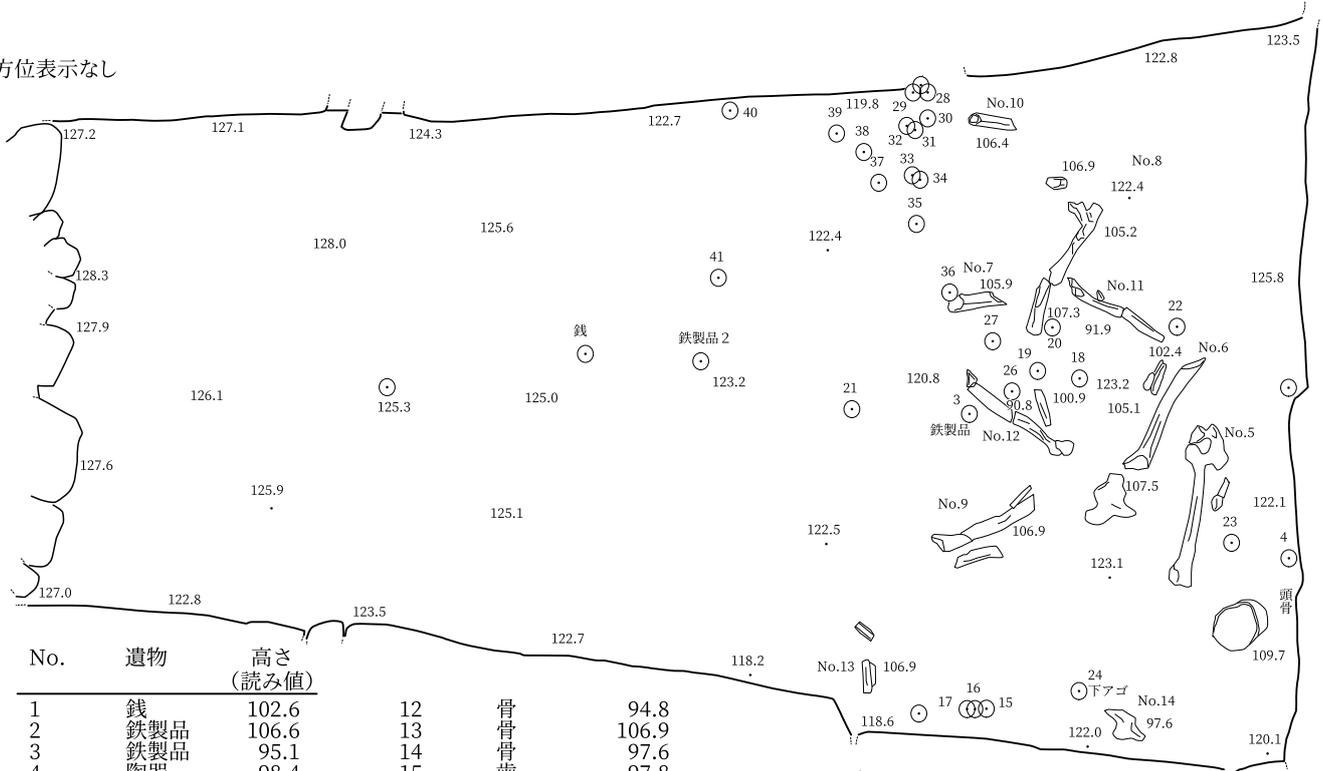


<筆者注> 作成途中であろうか

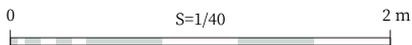


No. 8

方位表示なし



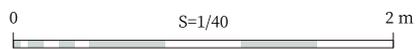
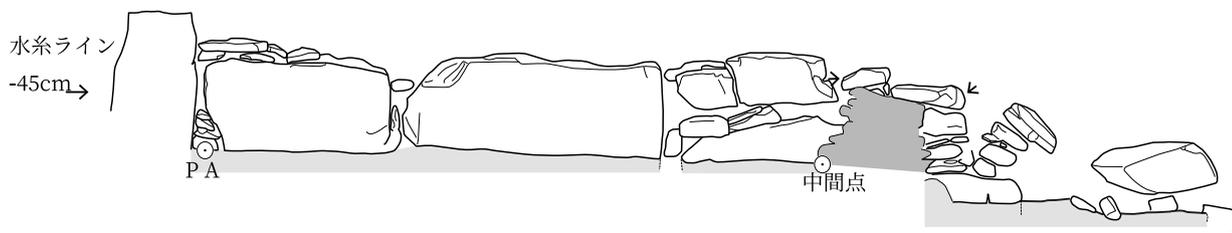
No.	遺物	高さ (読み値)	No.	遺物	高さ	No.	遺物	高さ
1	銭	102.6	12	骨	94.8	26	陶器	113.6
2	鉄製品	106.6	13	骨	106.9	27	銭	117.2
3	鉄製品	95.1	14	骨	97.6	28	鉄鏃	119.1
4	陶器	98.4	15	歯	97.8	29	鉄鏃	118.7
5	骨	102.3	16	歯	97.8	30	鉄鏃	120.1
6	骨	105.1	17	歯	97.8	31	鉄鏃	120.1
7	骨	107.3	18	銭	111.7	32	鉄鏃	119.2
8	骨	105.2	19	銭	111.7	33	鉄鏃	120.2
9	骨	106.9	20	銭	115.9	34	鉄鏃	120.2
10	骨	106.4	21	銭	116.4	35	鉄鏃	121.4
11	骨	91.9	22	銭	118.2			
			23	鉄製品	120.4			
			24	下アゴ	108.0			
			25	頭骨	109.7			
						36	鉄鏃	121.4
						37	鉄鏃	120.4
						38	鉄鏃	120.8
						39	鉄鏃	120.5
						40	鉄鏃	121.5
						41	土師器	123.0



No. 12

図6 下塚居古墳遺構図面(5)

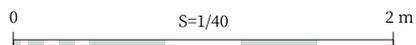
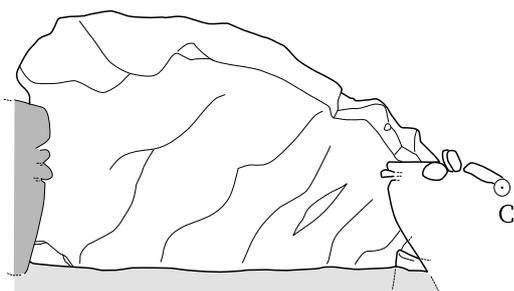
940811	940812
眼高 45	眼高 80
-90	-115
-45cm	-35cm



⊙
P A'
No. 9 上

眼高 80
-60
-20cm

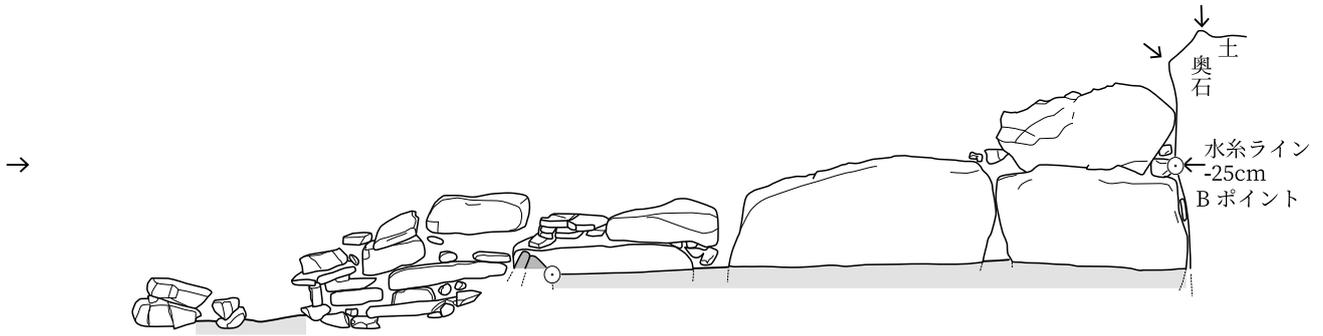
水糸ライン → ⊙ C



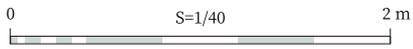
No. 9 下

図7 下塚居古墳遺構図面(6)

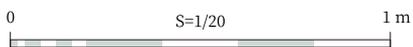
940811	940817
眼高 45	眼高 80
-70	-105
-25cm	-25cm



○
ポイント B'



No.10 上

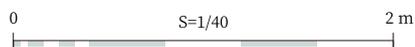
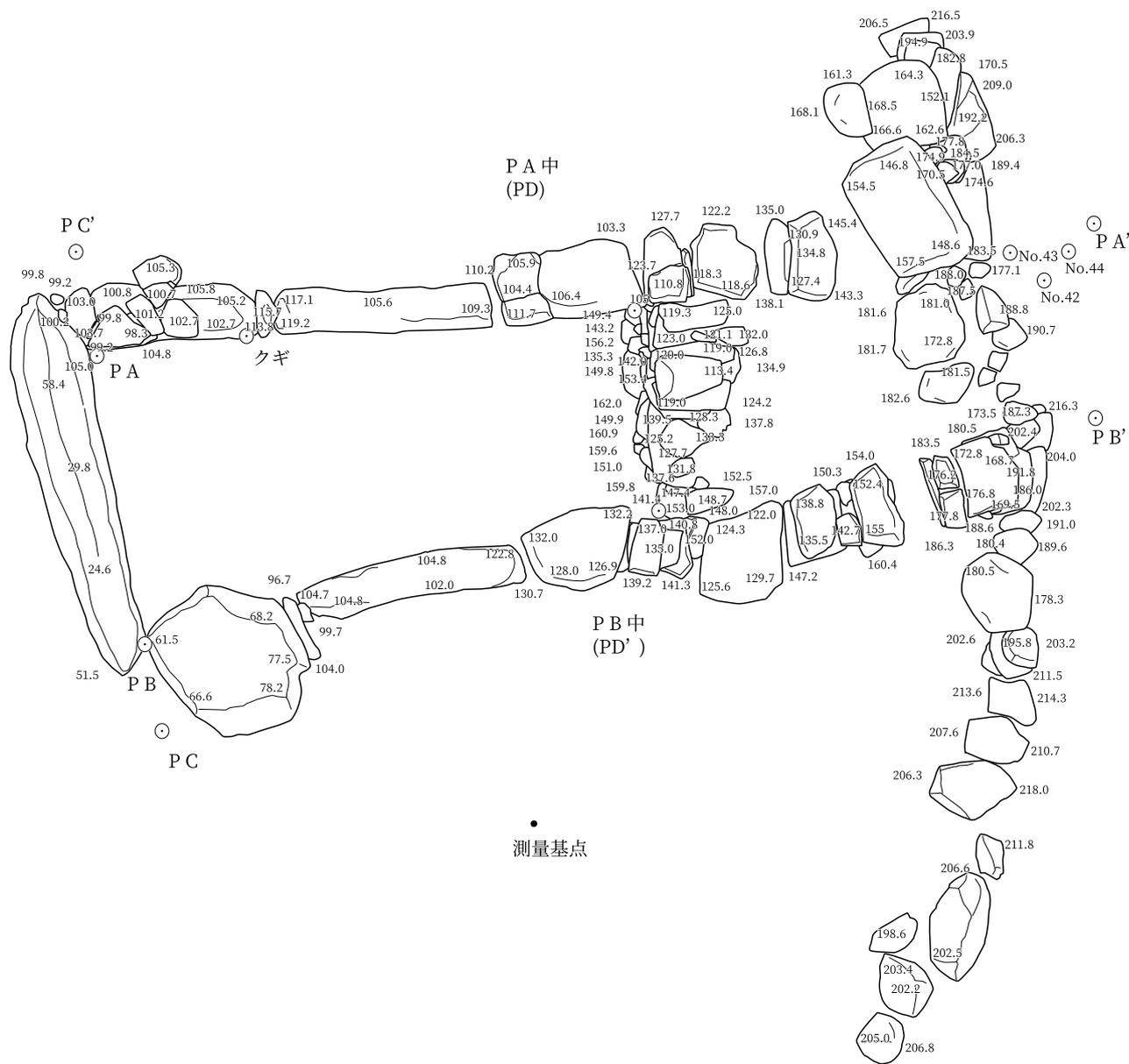


No.10 下

図8 下塚居古墳遺構図面(7)



No.	レベル	須惠器
42	213.0cm	須惠器
43	212.6	須惠器
44	230.8	須惠器



No.11

図9 下塚居古墳遺構図面(8)

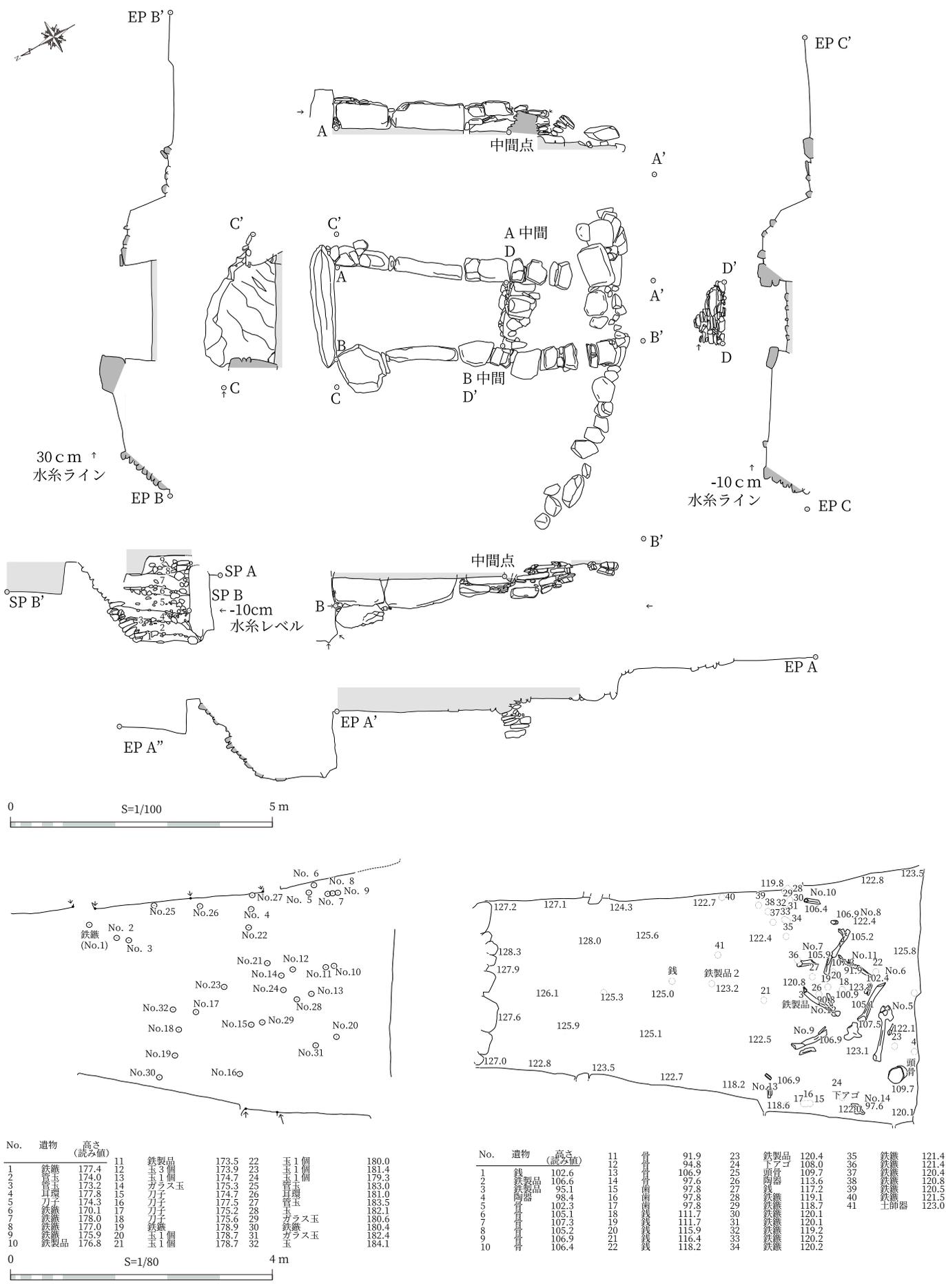


図 10 下塚居古墳遺構復原図

4. 下塚居古墳の遺構写真

遺構写真はネガフィルムとカラーポジフィルムの現像済み画像が2冊のアルバムに保管されていた。これらの中には同一の構図で3枚の写真が存在することから、適正露出とオーバー・アンダーでの撮影状況が復原され、また各カットの間に撮影されたスナップや誤操作と思しき写真など、現場でのカメラの利用状況を思わせるさまざまな写真が納められていた。

紙面の都合もあってすべてを掲載することができないため、写真の抽出作業を実施しつつ、可能な限り必要な画像を掲載するよう努めた。抽出条件は以下の要件で設定している。①ブレボケの少ない画像、②同一構図の適正露出と思しき画像、③アルバム中で唯一の構図が収められた画像の3点を条件として、39点の画像を抽出した。抽出画像は小鹿野町教育委員会の保有するスキャナを用いてスキャンを実施した。スキャン設定は600dpi、拡張子はtif形式を用いた。遺構図面と照合しつつ、撮影状況の可能な限りの復原を試みたうえで、便宜的にキャプションを付している。なお、適正露出とオーバー・アンダーのカットは、その現像画像のサイズから67フィルムが、残りの画像については35mmフィルムの使用が想定される。一部の画像については陰が映り込むのを防ぐためにブルーシートで遺構を覆って撮影されており、そのため色調が全体としてブルーシートに引きずられているカットも存在する。色調については全体に対してAdobe Photoshop 2020上で"Camera Raw"による色調の自動補正を実施している。そのため、実際の色味を反映していない点には注意が必要となる。

5. 下塚居古墳の遺構について

墳丘径は図面から判然としない。裏込の控え積みの長径は8.35mを計る。石室は全長5.55m、玄室長3.20m、玄室奥壁幅1.80m、玄門幅1.25m、羨道長2.30m、羨道幅1.20m、羨門幅1.05mとなる。石室内での遺物取上状況を記録している図面が2枚あることから、遺物を2面で捉えて取り上げた状態が想定される。ここからは遺物が原位置を保っておらず、石室内に遺物が散乱していた様子がみてとれる。また中世の銭が出土していることから、古墳時代以降において二次的に利用された可能性も考慮しなくてはならないだろう。

下塚居古墳の石室は奥壁幅—羨門幅が0.75mで、奥壁側からみた場合に「ハの字」形を呈する。青木弘の分類によると奥壁幅—羨門幅が0.5m以上の石室の形態は「羽子板形」となる(青木2016b:p.110)。本稿では青木の分類にしたがって、下塚居古墳の石室を無袖の「羽子板形」の平面形態として捉える。閉塞石が認められることから、短いながらも羨道部の存在が確認される。立面でみた場合には、壁面基底部付近しか遺存していないものの、上に向かって斜めにせりあがっている様子がみてとれる。また、羨道部と玄室で石材の大きさが異なる。玄室では基底部の石材が大きく、横長に設置されることから「長辺積み」(青木2016b:p.110)の石積みによって構築されたと考えられる。

No.4,6,7の図面や写真からうかがえるようにこの古墳には石室の裏込構造として「馬蹄形控え積み」(青木2013b)を採用している状況がみられるのが特徴で、この裏込構造は埼玉県内に多くの事例が確認されている。



写真1 下塚居古墳遠景



写真2 下塚居古墳正面俯瞰



写真3 下塚居古墳側面俯瞰



写真4 下塚居古墳石室全景



写真5 下塚居古墳石室斜め俯瞰



写真6 石室掘削状況



写真7 石室人骨等出土状況



写真8 石室の閉塞石(1)



写真9 石室の閉塞石(2)



写真10 石室掘削中遺物出土状況



写真11 玄室掘削状況



写真12 玄室左側壁付近遺物出土状況(1)



写真13 玄室左側壁付近遺物出土状況(2)



写真 14 玄室内床面掘削状況 (奥壁側より)



写真 15 玄室内床面敷石遺物出土状況 (奥壁側より)



写真 16 玄室閉塞石付近遺物出土状況 (1)



写真 17 玄室閉塞石付近遺物出土状況 (2)



写真 18 玄室遺物出土状況 (1)



写真 19 玄室遺物出土状況 (2)



写真 20 下塚居古墳調査風景



写真 21 下塚居古墳石室調査風景



写真 22 玄室全景



写真 23 玄室左侧壁



写真 24 玄室床面敷石状況



写真 25 玄室床面完掘状況



写真 26 閉塞石完掘状況



写真 27 羨道部右侧壁



写真 28 玄室左侧壁床面敷石上遺物出土状況



写真 29 玄室右侧壁床面敷石上遺物出土状況



写真 30 下塚居古墳の馬蹄形控え積み (奥壁側)

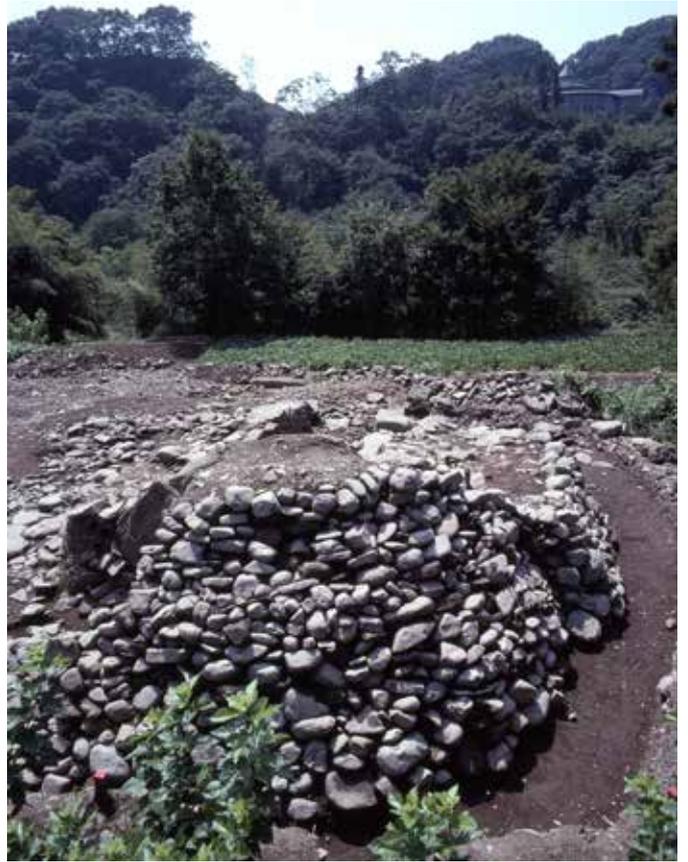


写真 31 下塚居古墳の馬蹄形控え積み (斜め)



写真 32 下塚居古墳の馬蹄形控え積み (左側斜め)



写真 33 下塚居古墳の馬蹄形控え積み (左側面)



写真 34 下塚居古墳石室奥壁右側面裏込構造



写真 35 下塚居古墳石室奥壁



写真 36 調査終了後の祈祷？(1)



写真 37 調査終了後の祈祷？(2)



写真 38 調査終了後に破壊される下塚居古墳(1)



写真 39 調査終了後に破壊される下塚居古墳(2)

6. まとめ

こうした石室の特徴は、埼玉県内の石室の分類と編年を進めている青木弘の研究を参照すると(青木 2013a, 2016b)、児玉郡域では、神川町青柳古墳群元阿保諏訪ノ木古墳例に馬蹄形控え積みと石室平面形態が類似する。同古墳群中の十二ヶ谷戸 10 号墳例・城戸野 1 号墳例は側壁基底石材を長辺積みにしており、極めて類似する。上記 2 例は「無袖短冊形 B-1 類型」の「グループ 4」(青木 2016b:p.114)と位置付けられている。しかし、下塚居古墳の石室平面形態は「無袖羽子板形」(青木 2016b:p.114)に該当するため、上記 2 例とは同じ類型には位置付けられない。分類要素を筆者が捉えきれていない可能性もあるため、慎重に検討していく必要があるだろう。

秩父郡域をみると皆野町金崎古墳群天神塚古墳例に石室の形態が類似する。同地域の石室はその石室石材に緑泥石片岩を採用している事例が多いものの、下塚居古墳には写真を見る限りでは片岩を確認することができず、灰色の川原石によって構築されている様子が見える。秩父郡域で灰色の川原石を採用する古墳としては、秩父市下久那古墳群氷雨塚古墳例が目に見える。当例は未報告ながら、墳丘に川原石が認められ、南側に石室が開口している。石室の規模は奥行 4.5m、幅 1.8m 程度である。この石室は平面形態は細長く、奥壁側がわずかに広く、立面形態は天井に向かいせり上がっており高さは低い。氷雨塚古墳例は下塚居古墳例と石材・石室ともに類似性が高く、氷雨塚古墳の今後の調査による基礎的情報の提示が期待される。

下塚居古墳の石室は奥壁に大型石材を用いており、周辺では金崎大塚 2 号墳例・3 号墳例と長瀬町上長瀬古墳群上ノ台 1 号墳例も奥壁に大型石材を用いる点が共通する。なお、金崎古墳群では天神塚古墳の石室平面形態は短冊形だが、2 号墳・3 号墳は胴張り式石室を採用しており、

上長瀬古墳群は発掘された3基の古墳すべてで胴張り式石室を採用している。

先述した十二ヶ谷戸10号墳はTK10型式新段階、元阿保諏訪ノ木古墳と天神塚古墳はTK43型式期に位置付けられ、いずれの事例も墳丘に埴輪を伴う。これらの事例は、青木弘が設定した「横穴式石室にみる群集墳の展開」の2期(TK43-209)(青木2016a:p.98)の中でも比較的古い段階に位置付けられよう。氷雨塚古墳は時期不明、大塚2号墳・3号墳は3期(飛鳥Ⅰ～Ⅱ)、上ノ台1号墳は4期(飛鳥Ⅲ～Ⅳ)にそれぞれ位置付けられる。

下塚居古墳の石室は構成要素が混在しており、明確には位置づけがたい。石室の裏込構造に馬蹄形控え積みを用い、墳丘は葺石を伴うものと考えられる。大塚初重は秩父市原谷4号墳の、積石塚にさらに土で覆う構造を秩父郡域の特異な現象として注目した(大塚1959)。しかし、現状では積石は、裏込構造として理解されており、県内に馬蹄形控え積みの裏込構造が多く確認されている。こうした現象の背景については秩父郡域や秩父盆地への入口にあたる児玉郡域の事例の検討を通じて改めて考えたい。

おわりに

秩父郡小鹿野町下塚居古墳の遺構について、調査図面と写真を整理して古墳の基礎的な情報を可能な限り提示した。記録保存調査であるがゆえに、最後には破壊されゆく古墳をファイナダーに収めた担当者の気持ちはいかばかりであったろうか。

執筆にあたって、資料調査等で下記の個人・機関にお世話になった。末筆ながら感謝申し上げます。(敬称略) 小鹿野町教育委員会・肥沼隆弘・山本正実

図表出典

図1 国土地理院が提供する国土基盤地図情報のうち「基本項目」ならびに「数値標高モデル(DEM)」を元に QGIS3.10.0-A Coruña' 上で操作し、下図を作成した。下図を作成した後、埼玉県埋蔵文化財情報公開ページ(埼玉県全域地図)(http://extra.pref.saitama.lg.jp/isekimap/pdf/45_ogano_town.pdf)において公開されている小鹿野町の遺跡包蔵地マップをプリントスクリーンによってjpg形式の画像として取り込んだのちに、ジオリファレンサーで重ね合わせて、包蔵地のうち古墳のみを抽出してプロットした。そののちにプロットした点への加筆とレイアウトを Adobe Illustrator 2020 でおこなった。

図2～9 小鹿野町教育委員会所蔵の原図を元に筆者トレース 図10 図2～9の成果をもとに筆者作成
写真1～39 小鹿野町教育委員会提供

引用文献

青木 弘 2013a「埼玉県内横穴式石室の事例集成」

『研究紀要』第27号 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 熊谷 pp.79-108

青木 弘 2013b「横穴式石室の基礎構造と裏込にみる古墳築造—埼玉県の事例を対象として—」

『古代』第131号 早稲田大学考古学会 東京 pp.109-141

青木 弘 2016a「埼玉県における群集墳の展開」

『群集墳展開の共通性と地域性』第21回東北・関東前方後円墳研究会 宇都宮 pp.95-114

青木 弘 2016b「埼玉県における横穴式石室の分類と編年—無袖石室と片袖石室を対象に—」

『研究紀要』第30号 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 熊谷 pp.107-134

青笹基史 2019「秩父郡小鹿野町副葬矢鏃の検討」

『埼玉県立史跡の博物館紀要』第12号 埼玉県立史跡の博物館行田 pp.43-62

大塚初重 1959「埼玉県秩父市原谷第一・第四号墳」『日本考古学年報八(昭和30年度)』日本考古学協会 東京

東海考古学フォーラム三河大会実行委員会 2001『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム